

2003年12月18日

人間科学研究科委員長殿

志田哲之氏の博士学位申請論文を下記の審査委員会は、人間科学研究科の委嘱を受け審査してきましたが、2003年12月18日に審査を終了しましたので、ここにその結果を報告します。

## 記

1.申請者氏名 志田哲之

2.論文題目 セクシュアリティと親密性の研究

3.本論文の主旨

人間の歴史は性の歴史と重なり合っている。食物を獲得すること、ものを加工し生産すること、秩序を作り社会の安寧を維持することと同列に、子どもをつくり育てることが加わり、人間の歴史に厚みをほどこしてきた。

本論文は人間の歴史を子どもをつくり育てる側から参与するのではないけれども、人間の思索に社会的な厚みを与えるもう一つの性にまつわる「セクシュアリティと親密性」に関する研究である。

同性愛についてセクシュアリティを構成主義的概念からアプローチすると、同性カップルの結合原理は親密性をおいてないことになる。この親密性はセクシュアリティが同性カップルという人間関係を通して現れる有様をつぎのよう3つの場面を設定して考察している。

そのひとつは、同性愛(者)の歴史的研究やアイデンティティ研究、さらには異性愛主義社会のあり方を問うてきた研究などの諸業績を評価しつつ、同性カップルの日常生活に視点を近づけて考察することである。

その2は、同性愛者個人に焦点を合わせるのではなく、同性カップルを対象にするように関係性に焦点を据えることである。

その3は、インタビュー調査の利点をフルに活用して関係の中から紡ぎ出される色とりどりの言葉を媒介に関係の手ざわり感を知覚する試みである。

かくして同性愛は「正しい性」と「正しくない性」の基準から判定されがちであるが、このレベルをこえて新しい性のあり方がしだいに存在感を持ち認知されるようになってきたのである。

セクシュアリティ研究やジェンダー研究からレズビアン/ゲイ研究とかクィア研究まで種々の視点からの同性愛への研究関心が高まってきている。

本論文は、同性愛研究をセクシュアリティと親密性の概念を手がかりに、この方面の研究をより高次の水準にまで押し上げようとする意図にもとづいて7章をもって課題に挑戦している。この挑戦は、自前のインタビュー調査の設計とその会話分析に非凡な手腕を発揮して成果を挙げていることから推して成功裏に行われた肯定することができる。

「同性愛者」はどこにいるのかと問いかけ、S.フロイトやM.フーコーのセクシュアリティへの貢献、本質主義と構築主義による同性愛論議などについて、研究史を簡単にレビューすることなどを踏まえて、インタビュー調査と会話

内容の分析にたどり着くのである。

同性愛者を対象にした調査研究は事柄の内容からあまり行われていなかった実情に鑑み、自前の調査を行い、インタビューで交わされた会話内容の分析から、既存の同性愛研究を批判的に摂取するところに、本論文のユニークさがある。

#### 4. 本論文の構成

同性愛に関する研究は、主にセクシュアリティ研究の領域で行われており、論文もセクシュアリティ研究に属するものである。

したがって 1 章では本論文が依拠している構築主義的視点からセクシュアリティとはなにかという現在も進行中の議論の論点をまず整理することから始めている。セクシュアリティの定義は、『セクシュアリティという概念そのものの成り立ちへの問いを含む、自己言及的研究』であり、『ありていに言えば、セクシュアリティ研究とは『無定義概念』である。そしてセクシュアリティ研究とは、人々が『セクシュアリティ』と呼び、表象するもの、そしてその名のもとで行為する仕方について研究する領域である』(6 ページ)とい回答となる。

日本の同性愛に関する社会的な研究の概観はこれまで行われてこなかった。そこで 2 章では約 10 年間の社会学分野における同性愛に関する研究の概観を提示し、その特徴を明らかにする試みに当てられている。社会学において同性愛に関する研究はじょじょに蓄積されてきているが、多くは理論的な研究や抵抗の運動理論に結びつくような研究として行われてきたことに言及している。

3 章では同性愛に関する当事者問題について考察を行っている。このような考察の必要を感じたのはアイデンティティの扱い方に注目しているからである。レズビアン/ゲイ・スタディーズやクィア・スタディーズの理論研究においても、日本におけるこの方面の研究はこれらの理論を用いた事例研究においても、既存の制度や意識への抵抗運動と密接に結びつく欧米のアイデンティティ研究の成果に傾斜しがちであるが、日本の場合は、同性愛者であることがあまり問題化されないのが実情である。日本の同性愛者のアイデンティティと欧米のそれを同じ文脈で論議することは困難であると考えているのである。

このような問題提起から、4 章ではライフヒストリー研究の手法に準拠してインタビュー調査を行い、その結果をもとに日本の同性愛者のアイデンティティを考察している。性的なアイデンティティは、社会的な言説のもとでいかに構築されたかについて論じている。ここで提示された同性愛者のアイデンティティとは、社会のさまざまな領域にある言説をもとに構築されていて、そのアイデンティティは可変的、かつ流動的であることが分かっている。

欧米における肯定的なアイデンティティと抵抗運動の成果として『親密性パラダイム』の出現と、社会制度上の権利獲得運動が挙げられる。5 章ではこのような欧米の動向からみて、日本における同性愛者のパートナーシップや家族がいかなるものかを探索的に研究する必要性について問題提起し、すでに行われている同性愛者とパートナーシップや家族について家族研究の検討を行っている。

6 章では同居する男性同性愛者のカップルインタビューのデータにもとづいて分析と考察を行い、アイデンティティ、ふたりの関係を説明するための語彙、家族意識、婚姻制度について論じている。その結果、アイデンティティはアイデンティティの顕在化をはかる文脈とは距離のあるものであったし、ふたりの関係を説明するものはきわめて私的な意味を持つ語彙を用いていた。家族は誰かという問いにはまず第一に定位家族が想定され、その後同居する

パートナーを挙げるケースが多かったし、婚姻制度についての評価は分かれたが、肯定的な対象者も否定的な対象者も同様に、社会からの同性愛者に対する否定的なまなざしについて言及していたことにふれている。

最後の7章では、本論文のまとめとして日本の同性愛者のアイデンティティと親密性の現状と将来について論じている。

## 5. 本論文の評価

本論文は日本における同性愛研究の転換点となる研究である。異性愛対同性愛の対比で問題状況が構成されているゆえに、同性愛(者)研究は問題状況を開示し、そこに潜んでいる問題点を明示することによって公共性の内実をいっそう豊かにすることに寄与するはずである。本論文は以下に述べる諸特徴によって、そのような期待に応えているゆえに、先行研究ともども時代を転換する位置に立っている。

人間と性とのかかわりは人間存在の根源にかかわっているため、硬い規制をいくつもの社会制度に結晶化して社会秩序を維持してきた。「正しい性」という言説には正統派の秩序がからんでいるし、これを基準に「正しくない性(レズビアン、ゲイ、ホモ、おかまなど)」が裁定される。家族制度を含め社会秩序は性をめぐる固有の構造を持っていて、誤認=承認の置き換えを日常的に頻りに繰り返している。このような日常性に現われる「正しい性」と「正しくない性」について本質論的視点に立つのかあるいは構築主義的視点に立つのかで、風景は異なって現われるのを承知した上で、本論文は後者の視点にもとづいて、主要には同性愛のアイデンティティ、レズビアン/ゲイ・スタディーズ、あるいはクィア・スタディーズの研究成果の日本への適用可能性、同性カップルの意識を論じている。その論述は終始理に立ち、知を生かして入り組んだ問題に取り組んでいる。「異性愛主義的な社会の諸領域からの言動がいかに関性愛パラダイム」の構築に寄与しているか」(23 ページ)を論述する地点から、異性愛主義対同性愛主義という並列の図式ではなく、異性愛主義対同性愛「皆」というアンバランスな関係」へ展開する問題状況に一步引いたスタンスで応じる本論文の文体は第一の特徴である。

文体に生かされている。こうした一步引いたスタンスは研究そのものに移っている。「(レズビアン/ゲイ・スタディーズなどの)理論に一定の距離を保ちながら、社会学的な手法を用いて日本の現状を踏まえながら微小な差異を記述することによって異性愛社会を記述してこうとする方向性」(36 ページ)「アイデンティティの確立されていない曖昧な主体を対象として捕捉することは困難をともなうが、同性愛をめぐり状況から考えると妥当な方向性」(同上)という言質は、インタビュー調査の各場面で相手の言葉を丁寧にフォローし、意味内容を確認していく手順に具体化されている。自前のインタビュー調査を設計・実施して得た資料は貴重であり、この調査の実施それ自体が第二の特徴であるといえるし、しかもインタビュー調査の展開中に見せるインタビュアーの手練手管は、1つの言葉が核となって、あたたかも雷だるまが転がって太っていくように、次の言葉をつむいで綾をなしていく。対象者がインタビュアーに寄せる信頼のサインが随所にただよっていることが散見されるからこそ、「微小な差異」(同上)をとらえるのに成功しているのである。これを第三の特徴に上げることができる。

家族を定位家族と生殖家族の概念を用いて定義できるが、同性カップルには定位家族を用いることができるにしても生殖家族は言語矛盾である。同性カップルの家族認識は異性愛主義用語で解釈せざるをえないゆえに、現行の秩序編成と対自的にぶつからざるをえない。同性愛の存在は大は結婚制度や遺産相続から小は家族手当にいたる日常性への異議申し立てをルール化する論理を提供している。このルールに紛れ込んでいる誤認=承認

の仕組みを、同性カップルが相手を夫の側あるいは妻の側、夫婦、パートナーの名字の名乗り方などについて語彙群からどのような言葉を選択するかに注目して分析している。「同性カップルの同居では、しばしば異性関係の比喻表現が使われ、それによって関係が補強される」(99 ページ)ことで、同性カップルの選択的な関係が運命的な関係に置き換えられようとする動機づけとなっている。しかし「ポスト定位家族としての家族像が明確化されていない」(101 ページ)有様に現代集団論のフロンティアがあるので、この現場を発掘したことは第四の特徴である。

本論文は、本論文に一貫している引いたスタンスとそれをテコに論理と事実に迫る手腕は研究に類例の少ない領域を開拓するいくつもの困難さを乗り越え、貴重な学術上の貢献を行っている。

志田哲之氏が提出した博士号請求論文『セクシュアリティと親密性の研究』は、以上の諸特徴の評価をふまえ、博士(人間科学)に値すると審査委員会は判断するに至った。

2003年12月18日

#### 志田哲之氏学位申請論文審査委員会

主査 早稲田大学教授・文学博士(早稲田大学)	濱口晴彦
副査 早稲田大学教授・博士(人間科学)(早稲田大学)	嵯峨座晴夫
副査 早稲田大学教授・学術博士(筑波大学)	寒川恒夫